

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Wordsworth and the Great War: Patriotism, Commemoration and Preservation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 朗子, YOSHIKAWA, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2394

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ワーズワスと第一次世界大戦

——愛国心、戦没者追悼、景観保護

吉川 朗子

1. イントロダクション

1915年8月のある晴れた夕方、イギリス湖水地方の中央に位置するグラスミアの村で、メアリ・オーガスタ・ウォード (Mary Augusta Ward) は窓から外を眺め、毎夏のようにダヴ・コテージに押し寄せていたアメリカ人旅行者の一団が今年は一人も見当たらないことに気づく (Ward 152)。その年の5月には、アメリカの旅客船ルシタニア号がドイツ軍の潜水艦の魚雷をうけて沈没、多数のアメリカ人を含む千人を越す犠牲者を出していた。¹ 第一次世界大戦が勃発して一年、その影響は、戦線からもロンドンからも遠く離れたグラスミアでも感じられるようになっていた。軍用輸送がすべてに優先されるようになり、イースター休暇用の鉄道格安切符は販売中止となり (“No Excursions for Easter”)、遊興用の車両へのガソリン供給も制限されていた (“Petrol Supplies” ; “No Petrol for Holiday Excursions”)。1915年4月に詩人ウィリアム・ワーズワスの誕生祭を開こうという計画もまた、戦時中ということで延期となった (“Wordsworth Day”)。しかし、戦争がワーズワス人気に打撃を与えたということではない。むしろ、戦争はすでに翳りが見え始めていたワーズワス人気のリバイバルをもたらしたと言った方がよいだろう。マーク・リード (Mark Reed) 編纂の『ワーズワス書誌』 (*Bibliography of William Wordsworth*) によると、ナポレオン戦争中の1802-1806年にかけて執筆された「愛国的」ソネットは、他のどの時期にもまして、第一次大戦中に多く再版されたのである。この小論では、20世紀初頭におけるワーズワス受容の様相を、湖水地方の観光、文化的景観という観点から概観し、

本稿は、2015年8月 Wordsworth Summer Conference で発表した原稿をもとに日本語で書き改めたものである。

¹ 1915年5月1日にニューヨークを出発してリヴァプールに向かったルシタニア号は、アイルランド沖でドイツ潜水艦の魚雷を受けて沈没した (“Absence of Americans”)。ルシタニア号沈没を受けてアメリカは参戦を決めたともいわれる。

それが第一次世界大戦によってどう変化したのかを辿る。ワーズワスがイギリスの国民意識形成に与えた影響について論じるジェイムズ・ガレットは、第一次世界大戦中のワーズワス再評価についても言及している (Garret 179–80)。また、ジョナサン・ウェスタウェイは大戦後の湖水地方において、いかにして山々が戦没者記念碑 (war memorial) として保全されていったかを検証している (Westaway 182–91)。本稿では、これら二つの先行研究にヒントを得ながら、湖水地方の景観保護運動が、戦時中のワーズワスの愛国的リバイバルを経て、戦没者追悼と結びついていくさまを明らかにする。戦時中、戦後それぞれの時期にワーズワスがどのように意識されたのかを検証することで、第一次世界大戦が湖水地方の文化的アイデンティティに与えた影響について考察したい。

2. 第一次大戦前のワーズワス受容

ワーズワスの暮らした家や通った学校、彼が眠る墓、詩に描かれた風景など、ゆかりの場所をめぐるワーズワス観光は、ヴィクトリア朝期に隆盛を見たのち、20世紀に入ってもしばらくは人気を保っていた。その促進に一役買ったブラック社のガイド (*Black's Picturesque Guide to the English Lakes*, 初版 1841年) やバッドリー (M. J. B. Baddeley) のガイド (*Thorough Guide to the English Lake District*, 初版 1880年) は再版を続けていたし、² 20世紀になって新しく出された旅行ガイドでも、ワーズワスは観光の目玉として取り上げられている。たとえばコリングウッドの1902年のガイドには「湖水地方に暮らす者にとって、ワーズワスの影を払いのけるのは困難だ。〈中略〉他方広く一般人にとって、グラスミアはワーズワスの愛した山々、彼が詩作をしたダヴ・コテージ、そしてローザ川のほとりの墓を意味する」(Collingwood 40, 42) と記され、ファーネス鉄道会社が1909年に出した携帯用ガイドブックは、文学観光とりわけワーズワス観光に焦点を当てている。³ ワーズワス愛好者を対象とする文学ガイドも相次いで出版され、魅力的な挿絵と詩の引用をふんだんに盛り込んで、ワーズワスゆかりの場所へと読者を誘っていた。⁴ 1891年に記念資料館としてオープンしたダヴ・コテージも、訪問者数を順調に伸ばしていた (Dove Cottage Visitors Books)。

² ブラック社のガイドはタイトルを変えつつ出版を続け、1929年には27版を出している。M.J.B. Baddeley のガイドも1910年までに少なくとも3つの新しい版が出され、その後も出版社を変え、1978年まで出版され続けた。

³ *The English Lake-Land. Guide to Hotels, Farmhouses, Country and Seaside Apartments in the Furness Railway District*. Ulverston: W. Homes, 1909.

⁴ Easton Smith Valentine, *Wordsworth's Country as Interpreted by his Poetry* (1909); Samuel Bensusan, *William Wordsworth: His Homes and Haunts. With Twelve Drawings in Crayon by A. Forestier and Four Portraits* (1910); Eric Robertson, *Wordsworthshire* (1911).

他方、『湖水案内』(*Guide to the Lakes*, 1810–1835) や 1844–45 年の鉄道敷設反対運動に見られる自然環境に対するワーズワスの考え方は、その後の湖水地方における様々な保護活動において影響を与え続けていた。たとえば、19 世紀末ごろから 20 世紀初頭にかけて、湖水地方では鉄道延伸やハイウェイ建設、ダム建設に対する反対運動、古い橋の破壊や遊歩道 (footpath) 閉鎖に対する抗議運動など、さまざまな景観保護運動が展開されたが、それらの運動を中心的に担ったひとり、ハードウィック・D・ローンズリー (Hardwick D. Rawnsley) はワーズワスの信奉者でもあり、彼の考え方にはワーズワスからの影響が色濃くみられる。⁵ また、湖水地方を「一種の国民的財産」と見做すワーズワスの考え方は、1895 年創設のナショナル・トラストの理念を支えることになったし、ガウバロウとアイラ滝を含むアルズウォーター湖畔を保全するための寄付金が募られた際には、「私はひとり雲のごとくさまよった」 (“I wandered lonely as a cloud”) などワーズワス作品ゆかりの場所であるという文学的価値が前面に押し出されてキャンペーンが行われたのである (“Gowbarrow Fell and Aira Force”)。⁶ つまり、20 世紀初頭までには、ワーズワスの名前は湖水地方の文化的アイデンティティにとって欠くことのできないものとなっていたと言える。

しかし他方では、皮肉なことに、湖水地方観光文化から切り離せないがゆえに、ワーズワスは徐々に、あらかじめ設定されたパッケージツアーの一要素に成り下がってしまう。「文学礼賛の風潮はどこへ行ってしまったのだろう」と 1915 年 9 月に出た『リヴァプール・デイリー・ポスト』(*Liverpool Daily Post*) の記事は嘆いている。

湖水派の文人たちの詩や散文は忘れられてしまったのだろうか。ダヴ・コテージは確かにまだ人気があるが、訪問者の多くはワーズワスゆかりの品に特別な興味があるわけではない。ダヴ・コテージはグラスミアやワイバンの教会と同じように、お勧めリストに入っているから訪れるに過ぎない。
 (“Absence of Americans”)

ワーズワスが桂冠詩人としての名声をいまだ保持していることは認めつつも、この記事は、「それは学校でワーズワスを読むことが必修になっているから」に

⁵ ローンズリーの景観保護運動に対するワーズワスの影響については、拙論 “Railways, Tourism and Preservation in the Victorian Lake District: from Wordsworth to Rawnsley” を参照のこと。

⁶ Gowbarrow はワーズワスが帯のように連なる黄水仙の花を見たという “I wandered lonely as a cloud” ゆかりの場所、また、Aira Force は 悲恋を扱う物語詩 “The Somnambulist” ゆかりの滝である。この場所は 1906 年に無事に買い取られて保全が決まった (“Gowbarrow and Aira Force”)。

すぎないと言い捨てる（同上）。自動車時代の到来というこの時期、ワーズワスを読む場は学校や大学のみという事態になっていたのである。

こうした変化は、ワーズワス作品に限らずロマン主義詩全般に見られたようだ。1914年4月のまた別の新聞記事では、1870年代に生まれた者と現代（1910年代）の若者との比較がなされている。

70年代に生まれた若者はカーライルやラスキン、エマソンやホイットマン、テニソンやブラウニングを読んで育った。社会のためになることならどんな小さなことでも、彼らは全霊をこめて行ったのである。現代の若者を何かに真剣に取り組ませるのは、はるかにむずかしい。彼らはゴルフやドライブで忙しく、他のことをする時間がない。詩を利他主義と呼び、そんなものは「くだらない」と言う。ユートピアなどつまらない。彼らは人生に幻想など抱かず、明るい光のなかの写真のように、くっきり明瞭な輪郭をもつものとして現実を捉えている。「気難しい」と思われるのは最悪な災難であり、ロマン主義など「ヴィクトリアン中葉」、過去の遺物なのである。
（“The Rising Generation”）

ここに示唆されているように、20世紀初頭に人々の感受性が本当に変化したのであれば、湖水地方観光が変質するのも避けられないであろう。ヴィクトリア朝期の偉大なるワーズワス信奉者たちはすでに鬼籍に入っていた——マシュー・アーノルド（Matthew Arnold）は1888年に、ジョン・ラスキン（John Ruskin）は1900年に亡くなっている。ワーズワスの伝記や書簡集、注釈入り全集の編集、『ワーズワス詩に描かれた湖水地方』（*The English Lake District as Interpreted in the Poems of Wordsworth*, 1878）などで知られるワーズワス学者ウィリアム・ナイト（William Knight）も、1916年にはこれに続くことになる。第一次世界大戦が勃発したころには、文学観光は、衰退とは言わないまでもかなり変質していたのである。こうした状況が、戦争によってどのような変化を受けるのか、それを次節では見ていきたい。

3. 愛国的リバイバル

1914年8月の開戦以降、海外からの旅行者は減っていたものの、国内では、大陸で休暇を過ごしていた富裕層が国内に行き先を変更したこともあり、湖水地方などではむしろ観光客の数は増えていた。先にも引いた1915年9月の『リヴァプール・ポスト』の記事には次のように記されている。

今年の夏の旅行客は、国内富裕層が一段と目立つ。いつもならヨーロッパ大陸や海辺で夏を過ごしてきた人たちだろう。湖水地方では〈中略〉ドイツの潜水艦がウィンダミア湖の遊覧船を攻撃するなどという心配はないので。（“Absence of Americans”）

ローンズリーは1916年4月の新聞記事で、「しばし戦争を忘れていられる」静かな場所、あるいは「ひとときの安らぎを得て気持ちを切り替えられる」場所を求め、多くの人が湖水地方を訪れている、と記している（Rawnsley, “Easter at the Lakes”）。また別の旅行記事には、ワーズワスの墓前に立った旅行者は、「穏やかで、安らぎを与える力を持つ自然と交わるよう仕向けてくれるワーズワスに、我々はどれだけの恩を負っているか」ということに気づくであろう、とある（“Peace by the English Lakes”）。

ワーズワスは、心の平安をもたらすような自然を主題とする作品を書いた一方で、自由と独立を謳いあげ、気持ちを鼓舞するような作品も残している。この新聞記事は次のように続けている。

[グラスミアを訪れる人々は]、「自由と独立についてのソネット」を書いた勇気ある作者に感謝の念を抱くだろう。イギリスには、逆境にあっても自信をもって立ち上がる力があることを、彼は信じて疑うことはなかった。そして1806年11月のソネットで、我々に次のことを心に留めるよう呼びかけたのだ。

自らの安全は自身のなかにこそ求めるべきだ。
 自らの右腕で手に入れるのだ。
 自分の足で立てなければ、倒れてしまう。⁷

このような時代に、〈中略〉ドイツが勝てば帝国の命運が尽きかねないというときに、ラッパのような声がグラスミアの墓から響きわたり、国の指導者たちに両手に勇気を持つよう訴え、イギリスが暗い時代にいかにして難局に立ち向かったかということについて、歴史から学べるのは喜ばしいことだと説いてくれるのはありがたい。（同上）

国が危機的状況にある今こそ、「自分の足で立てなければ倒れてしまう」という

⁷ “November 1806” (“Another Year! Another deadly blow,” 6-8)

ワーズワスのメッセージに耳を傾けよというのだ。この記事が書かれたのは、冒頭のメアリ・ウォードの記事と同じく 1915 年 8 月である。開戦から 1 年経ち、当初の楽観的な気分が消えて、国民の間に危機感や不安感がつのるなか、国家の自由と独立を求めるワーズワスのソネットが徐々に注目を集めだしていたことが窺える。

湖水地方南部に位置するダドン川流域は、ワーズワスの「ダドン・ソネット」(Duddon Sonnets, 1820) のおかげで 19 世紀半ばごろより旅行者に人気の場所となっていたが、このさらに南に位置する海に面したバロウには軍艦を作る造船所があり、工場からあがる煙はダドン溪谷からも見えた。1915 年春、ダドン下流域よりこれを目にしたローンズリーは、ワーズワスがもし今ここを訪れたなら、「ここでは大砲の音が風に乗って響くこともない」(Duddon Sonnet, xxxii) とは書かなかっただろう、と感慨にふける。そして「ブルーベルの咲くこの季節に、イングランドにとって本当に助けとなるのは誰だろうか。百年前に自由と独立に捧げるソネット群に魂を込めた人物を置いてほかあるまい」と語っている(Rawnsley, “The Bluebells of the Duddon” 108)。ガレットが指摘するように、ローンズリーはここで、ワーズワスを「イギリスの国民性を示すにふさわしい精神の持ち主として指名している」とも言えるだろう(Garrett 180)。『デイリー・メール』(Daily Mail) に載った記事もまた、ワーズワスこそ「国土の戦争を歌った選ばれし桂冠詩人」であり、その詩は「鬱々とした者には魂を支える水源となり、臆病な者には心を豊かにする宝庫となる」と褒め称えている(“The Poet for 1916”)。ある本屋は「戦争がもたらした効果」として「詩の売り上げ、とりわけワーズワス作品の売り上げが伸びたこと」を挙げるが、これを耳にしたジョン・ベイリーは、アンソロジー『ワーズワスの愛国詩』(1915)⁸の出版を影響として挙げつつ、「まるで今日の我々のために書かれたかのように読める」というワーズワス詩の特徴を指摘している(Bailey 183)。

そうした感慨は湖水地方観光にも反映されてくる。メアリ・ウォードをはじめ、多くの人が第一次大戦を百年前のワーズワス——フランス軍の侵攻に備えて地元の義勇軍に入隊したワーズワス——と結びつけて捉えようとした。1916 年夏にリヴァプールから湖水地方を休暇で訪れた C. M. R. と名乗る人物もそうしたひとりである。彼にとってこれは、4 年前に 4 人の友人と共に訪れた場所をひとりで再訪する追悼の旅であった。4 人のうち 3 人は戦死し、もうひと

⁸ A. H. D. Acland, ed. *The Patriotic Poetry of William Wordsworth. A Selection* (Oxford: Clarendon, 1915). この詩集に対するある書評記事は、「現在イギリス軍では、塹壕での疲弊する日々の慰めとしてこの小さな詩集を大事に思う学者兵士たちが 10 万はいるだろう」と記している。Modern Language Review, quoted in *Western Daily Press* 1 December 1916.

りもまだ戦地にいた。グラスミアの教会墓地でワーズワスの墓前に参ったのち、彼はダヴ・コテージを訪れる。以前と変わらずディクソン老夫人 (Mary Dixon) が管理人として勤めているのを見て嬉しくなるが、⁹夫人から5人の孫が兵隊として戦地に赴いているという話を聞き、戦争の影響が「山間に隠れた村にも浸透している」ことを実感させられる。ダヴ・コテージ裏庭のあずま屋に座っていると、C. M. R. の想いは「ワーズワスが湖のほとりのこの小さな家に暮っていた頃へと戻っていく」(C. M. R., “Grasmere: The Vale of Peace”)。¹⁰ その頃も湖水地方は戦争の噂でもちきりだった。C. M. R. は1803年10月14日付けの手紙——「グラスミアでは、男性はほぼ勢ぞろいしました。みな日曜日にアンブルサイドへ出かけて義勇軍に加わり、生まれて初めて軍服を身に付けるのです」¹¹ というワーズワスの手紙を引用する。ついで妹ドロシー・ワーズワス (Dorothy Wordsworth) が友人クラークソン夫人 (Mrs Clarkson) に宛てた手紙も引用している。

ウィリアムはグラスミアの大半の男性たちとともに、義勇軍に加わるべく出かけていきました。ああ！なんてことでしょう。メアリも私も、こんな辺鄙で静かな場所から人が招集されることがありませんように、と願うばかりです。フランス軍が上陸に初めて成功するという事態が起きない限り。そんなことになったら、つべこべ言っても仕方ありません。私たちはみな一緒に行くでしょう。でも国民全体が招集されるまでは、待っていてほしかったのです。¹²

親しい友を戦地で亡くすという C. M. R. の個人的な経験が、100年も前のワーズワスの危機感を身近なものに感じさせたのだろう。グラスミアという100年経ってもさして変わらず静かな山村に、たったの4年で大きく変わってしまった個人的事情を抱えて佇むとき、その同じ場所にたたずみ国の行く末を憂えていたワーズワスの想いを、C. M. R. は共有するのである。グラスミアは長きにわたって文学旅行者にとっての聖地であり、彼らは詩人の歩いた土地を歩き、座った場所に座り、同じ空気を吸うという体験を通して、詩人の存在を感じてき

⁹ Mary Dickson は1891年の開館当初よりダヴ・コテージの管理人をしていた (Hebron 120)。

¹⁰ 1803年秋、スコットランド旅行から帰ってきてすぐ、ワーズワスはアンブルサイド義勇軍に加わる。当時はナポレオンが上陸してくるという噂が広まり、国中でフランスとの戦いに備える義勇軍が結成されていた。ジェニー・アグロウによれば、1804年半ばまでに38万人が義勇軍に加わり、その数は正規の陸軍、海軍の数をはるかに上回っていたという (Uglow 348)。

¹¹ William Wordsworth to Sir George Beaumont, 14 October 1803, Wordsworth, *Letters, Early Years*, 409.

¹² Dorothy Wordsworth to Mrs. Thomas Clarkson, 9 October 1803. Wordsworth, *Letters, Early Years*, 403.

たが、20世紀に入り、観光の商業化が加速するにつれて、そうした文学旅行は衰えていく。一般的な趨勢としては詩人の名声が衰えていくなか、戦争がワーズワスと読者を再び結びつける役割を果たしたのは確かだろう。ベイリーが指摘しているように、「自分たちの置かれた状況がワーズワスのそれと類似していた」ことが、再評価に繋がったと言える。ワーズワスの詩は人々に「義務を思い出させた」のである (Bailey 186)。

戦時中のワーズワス受容には、二つの傾向が見て取れる。すなわち、20世紀初頭のイギリス人は、一方では、ナポレオン戦争時の危機的状況に置かれたワーズワスの姿に我が身を重ね、その詩のなかに、自国の自由と独立を守ろうという愛国心と勇気を鼓舞する言葉を見出そうとした。他方で彼らは、戦時中の不安や恐怖、緊張をひととき和らげ、慰めをもたらす言葉をワーズワスの詩に求めたのだ。戦地に赴く兵士たちにワーズワス詩集を持っていくよう勧めるイノック・グレイ (Enock Gray) は、「ワーズワスが言葉の魔法で鮮やかに描き出す美しく穏やかな風景は、塹壕に潜む兵士たちの緊張をひとときほぐし、戦地の過酷な状況を一瞬忘れさせてくれるに違いない」と説く。興味深いことに、グレイが勧めるのは愛国的な、戦意を鼓舞するような詩ではなく、「マイケル」、「廃屋」、「兄弟」など、自然の営みと歩調を合わせて暮らす人々を描き出す物語詩である。こうした詩は「ヘルヴェリン山のように大胆で強く」我々を「自然の懐へと導き入れ、その癒しの力を我々の心へもたらす」とグレイは力説している (Gray, “A Plain Man’s Notebook”)

このように、戦時中ワーズワスの詩は、一方では愛国心を鼓舞し、他方では慰めをもたらすものとして、人気の復活を見せたが、こうした二つの傾向は戦後、興味深い形で湖水地方の文化的景観に影響を与えることになる。何かを記念する風景という考え方——風景のなかには人の生きた証しが刻みこまれるというワーズワスの考え方が、山々を戦没者に捧げる記念碑にしようという動きへと繋がっていったのだ。第4節ではその状況について見ていきたい。

4. 戦没者記念碑として保全された山々

1918年11月11日の休戦協定で戦争が終わるが、終戦後初めてのイースター休暇には、湖水地方は多くの旅行者でにぎわった。ダヴ・コテージでも、1919年のイースターには、戦前よりも多くの人々が訪れている (Dove Cottage Visitors Books)。「戦争は多くの損害と悲惨さをもたらしたが、少なくともひとつよい結果をもたらした」と『タイムズ』への寄稿者は書いている。「戦争は多くの人を駆り立てて湖水地方へと連れ出し、その魅力に初めて気づかせる。イースター休暇のこの人出を見ればそれは一目瞭然だ」と、この記事は述べている。つ

いで、例年に比べてピラー、グレイト・ゲイブルズ、スコフェル・パイクに登る人の数が多いことが指摘され、「スタイヘッド自動車道の建設計画」のせいかもしれないという推測がなされる (“Daffodil Winder”)。これは内陸のボロウデイルと西岸部への入口となるワスデイルとをつなぐ、スタイヘッド峠越えの自動車道建設計画について言及したものである。この計画をめぐっては、1895年に初めて提案されて以来断続的に議論が続いており、戦争中に一時中断されていたものが終戦と同時に再燃した格好になっていた (Chorley 61)。湖水地方は中央に最も高い山々——カンブリア山系を抱えており、これが海岸部と内陸部とを分断する形になっている。峠越えの自動車道を通すことにより、18世紀末より観光地となっていた内陸部と、19世紀後半より海辺のリゾート地として急速に開発が進んでいた西海岸部との連絡をスムーズにし、観光客にとっての利便性を増すことが期待されていた。¹³

しかし、第一次大戦後満を持して再度提案された道路計画は、各方面から反対された。なかでも湖水地方山岳会 (Fell and Rock Climbing Club) 会長のフィリップ・マイナー (Philip Minor) は、「自動車旅行者の立場から見ても、この道路は全く不要だ」と主張し、次のように述べている。

夜ワスデイルに車で到着して、周囲の山々の壮大さに圧倒されたなら、目の前に広がる風景を急いで走り抜きたいなど思うことはないだろう。山歩きに慣れていない人でも、1時間も登れば頂上へたどり着ける。峠から見る山々の眺めはどちらを向いても素晴らしく、周囲の尾根道を歩いてみたいという気にさせられるだろう。(Minor, “Styhead Pass”)

ここには、70年前、ケンダルから鉄道の支線を延ばすことに反対したワーズワスのロジックが受け継がれている。計画に反対する公開書簡で、ワーズワスは、湖水地方の自然美を楽しむためにやってくる人ならば、ケンダルで列車を降りた後、美しい田園地帯を2時間歩くことを嫌がるだろうか、と問いかけた (*Guide to the Lakes* 140)。¹⁴ 同じように、20世紀初頭、湖水地方の山々を自動車の過度の流入から守ろうと訴える人々は、自動車という近代的な交通手段を好む者で

¹³ *Sheffield & Rotherham Independent* 4 October 1895; “The Proposed Road over Styhead Pass.” 1895–96年の段階では、建設費や維持費など地元民への負担が大きすぎるという理由で計画は却下された (“The Styhead Road and Wasdale Road”).

¹⁴ ワーズワスはまた、延伸された鉄道で湖水地方へ来ることになる旅行者は、「この土地の静謐な美が大きな犠牲を払ったことを知って、自らをこの地へ連れてきた交通手段のことを真っ先に嘆くことになるだろう。鉄道が侵入すればそうした事態は不可避だからだ」とも述べている (*Guide to the Lakes* 140)。

あっても、湖水地方の山岳美を楽しみにやってくる旅行者であれば、車を降りて山歩きをしたくなるはずだと主張するのだ。

スタイヘッドの山道を自動車道に作り変えようという計画は、結局、戦後の財政難を理由に1919年8月に却下された。「地方自治体に不必要な出費を控えさせたという点においては、戦争にも、禍と見えて実は恵みという効果がなかったわけではない」——少々回りくどい言い方ではあるが、『タイムズ』に掲載された1919年8月の記事はそう評価している（“Styhead Pass: Rejection of the Motor Road Scheme”）。しかし、スタイヘッド自動車道の建設が阻止されたのは、戦後の逼迫した財政のせいばかりではない。この記事は、4年の戦争期間を含む過去20年の間に人々の環境意識が変化したことについても指摘し、次のように述べる。

〔以前に比べ〕はるかに多くの人々が、心労からの解放と元気回復のためにスコフェルの山々が持つ孤独な静けさを保護することに深い関心を寄せている。年々仕事のストレスが増えるなか、心身の健康を真に取り戻すためにも、この国民のための娯楽の場所は、人々の福祉にとってより重要な意味をもつようになってきているのだ。（同上）

湖水地方の山々を「国民のための娯楽の場所（national playing-ground）」と呼ぶことには、多少アイロニカルな響きも感じられるが、国民の娯楽にとって最も必要なのは「孤独な静けさ」であるとしている点に、この記事の主眼があるのだろう。戦争で傷ついた心身、あるいは近代化が進んだ都会生活の疲れを癒すのは、賑やで都会的な娯楽ではなく、ひとり静かになれる自然環境であることが、広く認識され始めたのであろう。

そして、自動車の利便性よりもスコフェル山の静けさを守ることの重要性を説くために、再びワーズワスが再び持ち出される。

スコフェルの至高の魅力はその静けさにある。溪流の音も止み、大いなる穏やかさが訪れる。ひとりになりたい人はここで自らの魂を見出し、「大能を帯び、み力によってもろもろの山を堅く立たせられる」¹⁵御方と交わることができる。

目に見えぬものや潮の満ち引き、
 永続する力、絶えずかき乱される心の

¹⁵ 詩篇65篇6節

なかに存在する平和についての
信頼に足る知らせ

スコフェルの山頂にいと、こうしたものが「心臓、血液に沿って、感じられるのだ」 (同上)

山頂の静けさの価値を説くにあたって、詩篇からの一節に加えてワーズワスの『逍遙』(*The Excursion*, 1814) 第4巻からの4行(1138—41行)と「ティンタン僧院」(“Lines, Composed a Few Miles Above Tintern Abbey,” 1798)からの1行(28行目)が引用されている。前者は、疫病で妻子を亡くし、革命の大義に裏切られ、生きることに絶望して世捨て人ようになっていた「孤独者」が、自然の癒しの力に心を開くよう諭される場面からの引用である。一方後者は、都会の喧騒のなか心が疲弊する時に、記憶に蘇るワイ川の美しい風景がいかにも心を慰めてくれたかを語る場面からの1行である。つまり、『タイムズ』のこの記事は、戦争等で疲弊した人々の心を癒し、慰める場として、山々の静寂を自動車流入から守らねばならないと説くのだ。

そして、「娯楽の場 (playing-ground)」とされるスコフェル山を、戦地で命を落とした人々への記念碑として永遠に保全することが提案される。

美しいイギリスのために命を落とした勇者たちに捧げる記念碑として、彼らの名において、彼らのために、静寂と魂の高揚をもたらすこの場所、自由と健康を守るこの場所を代々受け継いでいくこと、これに勝つことはないだろう。スコフェルの山肌をなでる風のように自由でいるために、ここに永久に宿る平和のために、大いなる休息と素朴な喜び、高貴な幸せを尊ぶ国のために命を捧げた人々へ、国民からの感謝の念を示すものとして、この場所を代々受け継いでいこう。(同上)

この提案は、きわめてワーズワス的で興味深い。湖水地方は、ワーズワスが1810年に「一種の国民的財産」であると宣言して以来、そして1840年代以降展開された様々な景観保護運動を通して、次第に(単に地元住民のものでなく)国民全体の財産とみなされるようになっていた。¹⁶他方、ワーズワスは湖水地方を自

¹⁶ 湖水地方の景観保護運動は、地元よりもケンブリッジやオックスフォード、ロンドンの知識人に牽引される形で展開された。一連の保護運動を通して、湖水地方は地元の人々の手を離れ「国民の」財産に転じてしまったともいえる。ガレットは、ワーズワスが望むように湖水地方の「保護は国全体の命題となったが、それと引き換えに、ワーズワスが最も守りたかった地元の独立を明け渡すことになってしまった」と指摘している (Garrett 182)。

由と独立の精神を尊ぶ「山間の共和国 (mountain republic)」とも呼んでいる (*Guide to the Lakes* 67-68)。この考え方が、彼の愛国的ソネット群に表明された「自由と独立を尊ぶ共和国としてのイギリス」という考え方と結びつき、ここから、湖水地方という一地方の山々を、国のために命を落とした戦没者に捧げる記念碑にしようという発想につながっていったのだと思われる。1913年に歴史家トレヴェリヤンは、スタイヘッドを囲む山々について「国民として、この素晴らしい山の一群のことを誇らしく思う。ワーズワスを通してこれらの山々は、国民的な詩の復興、そして山岳風景に対するイギリス人の愛情の芽生えと結び付けられたのだ」と述べている (Trevelyan, “The Styhead Road”)。桂冠詩人ワーズワスが生まれ故郷でありかつ「国民の財産」とみなされた山々と関連付けられ、戦時中の愛国的な雰囲気の中でそのソネット群が再び脚光を浴びたことで、ワーズワスの郷土愛は愛国心へとすり替えられ、戦後、それらの山々を、イギリス人の自由・独立精神のシンボルとして記念碑化することへとつながったのだ。

まずは1919年の9月、第3代レコンフィールド男爵 (Charles Wyndham) が、私有地であったスコフェル・パイクを「戦没者に捧げる記念碑」としてナショナル・トラストに寄贈した。¹⁷これに続いて、1923年10月には湖水地方山岳会が12の山を購入し、故郷のために戦地に倒れた20名の会員を追悼するものとしてこれをナショナル・トラストに寄贈した。そして1925年、詩人の孫にあたるゴードン・ワーズワス (Gordon Wordsworth) が友人ベイソン (A. C. Bason) とともにスコフェル山頂を、やはり戦没者への追悼として寄贈した。これにより、スコフェルを囲む山々はすべてナショナル・トラストの管理下で一般に開放されることとなった (Palmer 366)。山を愛し遠い異国の地に散った人々の思い出は、自動車その他の喧騒から離れた山の静謐な美しさとともに、永遠に保存されることになったのだ。

山岳会の会員の一人が、これらの山々を記念碑にすることについて、次のような興味深いコメントを寄せている。

仲間のうちの誰かが亡くなっても、彼らの愛した土地には、彼らのことを、彼らの成したことを、永遠に覚えている片隅があるものだ——彼らとはどこしえなる山の合間に永遠の記念碑を見つけたのだ。この土地の静謐なる美が彼らに力を与え、その力が我々を救ってくれた。そして今、彼らが呼び起こした愛の力が、その美を永続的に保護するよう導く。彼らは先祖から

¹⁷ 記念碑は1921年8月にスコフェル・パイクの頂上に据えられた。

受け継いだものを救うべく命を捧げた。その遺産が蛮行によって破壊されることがないように、死をもって守ったのだ。（“The War Memorial” 240）

ルパート・ブルック（Rupert Brooke）の「兵士」（“The Soldier”）の冒頭部（「もし僕が死んだなら、こう考えてほしい／異国の地のどこかに／永遠にイングランドとなる片隅があるのだと」）を彷彿とさせるこの文章のロジックはつまり、生まれ故郷の山に対する愛情が戦地に赴いた兵士たちの心を支え、そのおかげで山々が守られた、ゆえに永久なる山々は彼らの思い出を守ろうとする、ゆえに我々遺された者は山々を守らなければならない、ということだろう。1924年6月、グレイト・ゲイブル山頂に設置された記念碑の除幕式に出席した帰還兵 J. W. ヤングは、「この記念碑には、精神が束縛されているところには自由はないと信じる人々の名が刻まれている。〈中略〉彼らに敬意を表して、この山々の自由を確保しよう」と述べている。それまで私有地であった山頂を一般に開放し、誰でも自由に登ってこられるようにすることが、イギリス人の精神的自由のために戦った人々へ敬意と感謝を捧げるのに一番相応しい方法とみなされたのだ（“Mountain War Memorial”）。

山自体が戦没者記念碑となったことについて、ジョナサン・ウェスタウエイは、「風景自身が極めて力強い記憶の場所だった」のであり、「死者に対する最良の慰霊とは、生きている者のためにその土地へのアクセス権を永遠に確保することだったのだ」と評している（Westaway 188）。戦地で命を落とした仲間の思い出を保存するために、物理的に記念碑を建てる必要はなかったのだ。思い出と記念碑に対するそのような態度は、山間の教会墓地についてのワーズワスの有名な詩行を思い出させる。

この谷の住民は

亡き人がこの世に残した生きたあかしを
口伝えに、また無言のうちに心のなかに留めている。
愛情深い碑文より優しく忠実な
保管場所に預けているのだ。
というのも、もし記憶がなくなったら
碑文を彫り付けた墓など何の役に立つだろう。

（『逍遙』第6巻 626-31行）

同じような考え方は「兄弟」(“The Brothers”)の冒頭部にも見られる。¹⁸ これらの詩は、湖水地方における古い慣習では、亡くなった住民の思い出を風景の一部として大切にしていたということを伝えている。亡くなった人々の思い出は、いわば、その土地のトポグラフィに埋め込まれ、思い出を託された風景は死者と生者をつなぎ、その共同体を守る——そうしたワーズワスの考え方、あるいは湖水地方における慣習的な考え方を、湖水地方へ来る文学巡礼者たちもまた、少なくとも20世紀初頭までは共有していた。彼らは、ワーズワスの面影、その霊が彼の愛した風景にまだたゆたっていると信じていることができていた。

風景に対するこうした態度は、20世紀が進むにつれて次第に失われていったのは確かであろう。しかし、完全に失われたわけではなかった。第一次大戦が終わると、人々は自由のために戦い、死んでいった仲間のことを思い出すために、山を登り始めた。ワーズワスやサウジーが、家族友人ともに、ワーテルローの戦いでの勝利を祝して1815年スキドーの山に登ったように(Southey 4. 122-23)。スコフェル山頂にある戦没者記念碑を、年に一度メモリアル・デーに訪れるというイベントは、今でも守られている。自然風景のなかで死者を想うというワーズワスの精神が、二度の大戦を経て今なお生き続けていることの証左と言えるのではないだろうか。

他方、R. S. T. チョーリーは、スタイヘッド峠を通す自動車道の建設計画が最終的に却下されたことを祝す記事の結びで、「自由を守るためには、人事のみならず山々に関しても、永遠に警戒し続けることが大切である」(Chorley 65)と述べている。湖水地方の山々へは誰でも自由に登ることができる。それにつれて山の景観・環境が損なわれかねない事態も起きてくる。それでも、その両方のバランス(自由通行権と環境保全)を保つことこそが、亡き人の思い出が刻まれ、自由独立を愛する心が刻まれた湖水地方の文化的景観を、国民の財産、ひいては国際的財産として、受け継いでいくことになる。ワーズワスの自然保護的精神と愛国的精神とが、第一次大戦を通して、湖水地方の文化的アイデンティティにより深く結びついていったと言えるだろう。

参考文献

- “Absence of Americans.” *Liverpool Daily Post and Mercury* 9 September 1915.
 Acland, A. H. D., ed. *The Patriotic Poetry of William Wordsworth. A Selection*. Oxford: Clarendon, 1915.
 Bailey, John. *The Continuity of Letters*. Oxford: Clarendon, 1923.

¹⁸ “In our church-yard / Is neither epitaph nor monument, / Tomb-stone nor name, only the turf we tread, / And few natural graves” (“The Brothers,” 12-15).

- Bensusan, Samuel. *William Wordsworth: His Homes and Haunts. With Twelve Drawings in Crayon by A. Forestier and Four Portraits*. London: T. C. & E. C. Jack, 1910.
- Chorley, R. S. T. “Styhead Pass.” *The Journal of the Fell and Rock Climbing Club* 15.1 (1919): 60–65.
- C. M. R. “Grasmere: The Vale of Peace.” *Liverpool Post and Mercury* 13 July 1916.
- Collingwood, W. G. *The Lake Counties, with Special Articles on Birds, Butterflies ... Shooting, and Cycling... illustrated by Cuthbert Rigby*. London: Dent, 1902.
- “Daffodil Winter. Spring Weather on the Fells.” *The Times* 30 April 1919.
- Dove Cottage Visitors Books. 1900~1920. [2001. R2. 3 ~ 9 WLMSA / Dove Cottage / 3~9] The Wordsworth Trust. Dove Cottage.
- Furness Railway. *The English Lake-Land. Guide to Hotels, Farmhouses, Country and Seaside Apartments in the Furness Railway District*. Ulverston: W. Homes, 1909.
- Garret, James. *William Wordsworth and the Writing of the Nation*. Aldershot: Ashgate, 2008.
- “Gowbarrow Fell and Aira Force.” *The Times* 9 August 1906.
- Gray, Enoch. “A Plain Man’s Notebook.” *Liverpool Daily Post & Mercury* 22 July 1918.
- Hebron, Stephen. *Dove Cottage*. Grasmere: The Wordsworth Trust, 2009.
- Minor, Philip S. “Styhead Pass.” *The Times* 16 April 1919.
- “Mountain War Memorial: Unveiling of Tablet on Great Gable.” *The Times* 9 June 1924.
- “No Excursions for Easter.” *The Times* 24 March 1915.
- “No Petrol for Holiday Excursions.” *Western Daily Press* 25 July 1917.
- Palmer, W. T. “Unveiling the War Memorial Tablet, Great Gable, June 8, 1924.” *The Journal of the Fell and Rock Climbing Club* 6.3 (1924): 365–68.
- “Peace by the English Lakes: the Message of Wordsworth.” *The Times* 25 August 1915.
- “Petrol Supplies: Needs of Munition Firms.” *The Times* 31 July 1916.
- “The Poet for 1916: Philosophising with a Word. How the War will be Determined.” *Daily Mail* 5 October 1915.
- “The Proposed Road over Styhead Pass.” *North Eastern Daily Gazette* 23 May 1896.
- Rawnsley, H. D. “The Bluebells of the Duddon.” *Past and Present at the English Lakes*. Glasgow: MacLehose, 1906.
- . “Easter at the Lakes. Colours and Flowers of Spring.” *The Times* 13 April 1916.

- Reed, Mark, ed. *Bibliography of William Wordsworth, 1787–1930*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- “The Rising Generation: The Young Man and Woman of Today.” *Manchester Evening News* 14 April 1914.
- Robertson, Eric. *Wordsworthshire*. London: Chatto & Windus, 1911.
- Southey, Charles Cuthbert, ed. *The Life and Correspondence of Robert Southey*, 6 vols. London: Longman, 1849–1850.
- “Styhead Pass: Rejection of the Motor Road Scheme.” *The Times* 7 August 1919.
- “The Styhead Road and Wasdale Road.” *Standard* 23 October 1895.
- Trevelyan, G. M. “The Styhead Road.” *The Times* 22 October 1913.
- Uglow, Jenny. *In These Times: Living in Britain through Napoleon’s Wars, 1793–1815*. London: Faber & Faber, 2014.
- Valentine, Easton Smith. *Wordsworth’s Country as Interpreted by his Poetry*. Dundee: Valentine & Son, 1909.
- “The War Memorial.” *The Journal of the Fell and Rock Climbing Club* 6.2 (1923): 240–44.
- Ward, Mary Ann. “Wordsworth’s Valley in War-Time.” *The Book of the Homeless*. Ed. Edith Wharton. London: Macmillan, 1916.
- Westaway, Jonathan. “Mountains of Memory, Landscapes of Loss: Scafell Pike and Great Gable as War Memorials, 1919–24.” *Landscapes* 14.2 (2013): 174–93.
- “Wordsworth Day.” *Manchester Courier* 15 March 1915.
- Wordsworth, William. *The Excursion*. Ed. Sally Bushell, James A. Butler, and Michael C. Jaye. Ithaca: Cornell University Press, 2007.
- . *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1798–1800*. Ed. James A. Butler and Karen Green. Ithaca: Cornell University Press, 1992.
- . *Guide to the Lakes*. Ed. Ernest de Selincourt. 1906. Reprinted with a new preface by Stephen Gill. London: Frances Lincoln, 2004.
- Wordsworth, William and Dorothy. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth. The Early Years, 1787–1805*. Ed. by Ernest de Selincourt. Revd by Chester L. Shaver. Oxford: Clarendon Press, 1967.
- Yoshikawa, Saeko. “Railways, Tourism, and Preservation in the Victorian Lake District: from Wordsworth to Rawnsley.” *Victorian Ecocriticism: The Politics of Place and Early Environmental Justice*. Ed. Dewey Hall. Lanham, Maryland: Lexington Books, 2017. 15–32.

Keywords : ワーズワス 第一次世界大戦 愛国心 戦没者記念碑 景観保護